大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

アーレントとツェラン：ふたりを結ぶいくつかの子午線をめぐって

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-06-22
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 細見, 和之
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002863

人間科学：大阪府立大学紀要 2(2006)，3-19 （2007年3月刊行）

アーレントとツェラン

ふたりを結ぶいくつかの子午線をめぐって

細見　和之*

はじめに

言うまでもなくハンナ・アーレントは20世紀を代表する政治思想家であって、その主要な著作すべてが日本語に翻訳されている。20世紀にドイツで生まれた思想家としては、現在、ベンヤミンと並んでよく読まれている存在だろう。彼女の「公共性」「公共圏」をめぐる政治思想は、とりわけ1990年代以降、日本でも盛んに論じられている。ヨーロッパの古典についての該博な知識と、およそタブーというものと無縁な歯に絹着せぬ物言い、さらには粘り強い思考と直観的な飛躍。アーレントの思考はそういう魅力に満ちている。

一方ツェランは、日本における一般的な詩の不人気もあって、アーレントほどに論じられることは少ないかもしれない。しかし、戦後にドイツ語で詩を書いた詩人のなかでは、特権的と呼ばれてしかるべき位置にいる。ほぼすべての作品について、飯吉光夫訳と中村朝子訳の二種類が刊行され、ツェランの作品一つひとつに丁寧な解釈をくわえた共同研究も着実に出版されている[1]。これは欧米の研究動向をそのままに反映した結果でもあって、いまやツェランは少なくとも合衆国とヨーロッパにおいて、20世紀を代表する詩人のひとりという評価は揺るぎがないだろう。

しかし、ともにユダヤ系の思想家、詩人として20世紀の困難な日々を生きざるをえなかったアーレントとツェランだが、じつはこの両者のあいだに具体的な交錯の痕跡はない。私が読むかぎりアーレントのテクストにツェランの名は一度として登場しないし、ツェランにおけるアーレントについても同様である。両者に関する研究においても、ふたりが何らかの布置関係に置かれることはない。しかし、このふたりは実際にはきわどい遭遇関係にあった。両者とハイデガーの関係を念頭に置いてみるだけでも、そのことは明らかだろう。アーレントはハイデガーと一時期恋愛関係にすらあったし、ツェランとハイデガーの関係は20世紀の詩と思索をめぐる重要なテーマの一つ

---

* 大阪府立大学人間社会学部人間科学科

1 以下を参照。中央大学人文科学研究所編『ツェラーン研究の現在』中央大学出版部、1998年。中央大学人文科学研究所編『ツェラーンを読むということ』中央大学出版部、2006年。

である。今回はハイデガーに対する両者の関係そのものを主題化することはできないが、本稿はこの大きなテーマに対して、いくつかの補助線を引いておく試みでもある。

ここであらためてふたりの「ユダヤ人」としての境涯を確認しておこう[2]。

アーレントは1906年にユダヤ人、ユダヤ教徒の両親のもとに生まれたが、彼女の両親はけっして古式ゆかしき敬虔なユダヤ教徒ではなかった。彼女の母親が社会民主党の支持者で、とくにローザ・ルクセンブルクを尊敬していたことはよく知られている。彼女はそのようなヨーロッパ社会の啓蒙精神に馴染んだ家庭に育ったのである。しかし、この点はアーレントのだいじな側面の一つになるが、彼女はユダヤ人としてのアイデンティティを生涯強固に抱いていた。シオニストの主流に対してははっきりと距離をとりながら、しかし「ユダヤ人」というあり方を隠蔽して成りあがってゆく者に対しては、あくまでヨーロッパ社会のなかの「パーリア」としての規定を引き受けてゆくこと、そういう困難な選択が彼女の根本的な生き方だった。

一方、1920年に当時はルーマニア領下にあったチェルノヴィッツにユダヤ人の両親のもとに生まれたツェランは、ナチスの台頭のもと強制収容所で両親を奪われた。ツェランもまた基本的には同化ユダヤ人の生活環境で成育し、母語もドイツ語だったが、ナチズム体験をつうじて、「ユダヤ人」としてのアイデンティティをいっそう明瞭に意識せざるをえなくなる。彼は殺戮された両親の記憶を携えて、戦後はパリで暮らしながら、ドイツ語での詩作に耽った。ルーマニア語、フランス語、ロシア語、英語、イタリア語、さらにはヘブライ語からの膨大な翻訳を果たしながら、である。

アーレントは合衆国に渡ってからは、彼女にとって第三言語にあたる英語での叙述に取り組むが、ツェランはアーレントよりも遥かに多言語能力をもち、戦後の日常生活をフランス語で行ないながら、表現言語としては母語であったドイツ語で書きつづけた。思想家と詩人という両者の基本的な差異をそこに見ることも可能だが、しかし、すぐに確認するようにアーレントにとっても母語であったドイツ語が合衆国で単純に英語に置き換わったわけではない。ドイツ語は彼女のいわば「思考の言語」でありつづけたのだ。

ここでは、このような文字どおり、ナチス支配による横断ないし切断体験に貫かれ

---

[2] 以下、アーレントの伝記的事実については Elisabeth Young-Bruehl, *Hannah Arendt*, New Haven&London, 1982（エリザベス・ヤング・ブルーエル『ハンナ・アーレント伝』荒川幾男・原一子・本間直子・宮内寿子訳、晶文社、1999年）に、ツェランについては Israel Chalfen, *Paul Celan*, Frankfurt am Main 1983（イスラエル・ハルフェン『パウル・ツェラーン』相原勝・北彰訳、未來社、1996年）を参照している。

たアーレントとツェランのあいだにありえた、あるいは現に存在した、いくつかの共通接線――ツェランが印象的に語ったふたつの土地を結ぶあの「子午線Meridian」[3]――を探ることによって、20 世紀の思想の一断面を私なりに示してみたい。

「残ったもの」としての「母語」

先に記したとおり、合衆国に亡命してからは、英語での著述を開始したアーレントだったが、彼女においてドイツ語は英語に完全に置き換えられたわけではなかった。1933 年にパリに亡命したのち 1951 年に合衆国の市民権を取得するまで彼女は「無国籍者」というきわめて不安定な身分で過ごすことになり、合衆国では英語での講義と叙述に積極的に取り組んでいったが、1964 年 12 月に西ドイツのテレビで放映されたジャーナリスト、ギュンター・ガウスとの対話（インタビュー）のなかで、ナチズム期を乗り越えて自分のなかに残ったほとんどただひとつのものを、彼女は「母語」と答えている。印象的な応答なので、少々長くなるが引用しておきたい。

> ガウス　……シカゴでお仕事をなさっています。お住まいはニューヨークですね。1940 年にご結婚されたあなたのおつれあいも、同じく哲学教授としてアメリカで活動なさっています。1933 年に幻滅された後、現在再び属しておられる学術分野にはいまでは国際的な広がりがあります。それでもお伺いしたいのですが、ヒトラー以前のヨーロッパが二度と存在しないことを寂しくお思いになりますか。ヨーロッパにいらっしゃる際、何が残り何が救いがたく失われたという印象をおもちになりますか。
>
> アーレント　ヒトラー以前のヨーロッパですか？　何の郷愁もありません。残ったものですか？　残ったものは、言葉です。
>
> ガウス　それはあなたにとって重要な意味をもちますか。
>
> アーレント　非常に重要です。私はつねに意識して、母語を失うことを拒んできました。当時うまく話せたフランス語に対しても、今日書いている英語に対しても、

[3] 以下のツェランのビューヒナー賞受賞講演「子午線 Der Meridian」を参照。Paul Celan, *Der Meridian und andere Prosa*, Frankfurt am Main 1988.これには以下に収められた二つの日本語訳がある。飯吉光夫訳『パウル・ツェラン詩論集』静地社、1986 年、谷口廣治監訳『照らし出された戦後ドイツ――ゲオルク・ビューヒナー賞記念講演集（1951-1999）』人文書院、2000 年。

私はある程度距離を保ってきました。

ガウス　お尋ねしようと思っていたのですが、あなたはいまでは英語でお書きになっていらっしゃるのですか。

アーレント　そうです。しかし、距離感をなくしたことは一度もありません。母語と他の言語との間にはとてつもない差があります。私に関してそれは実にはっきりと言い切れることなのです。ドイツ語では、私はドイツの詩の大部分を暗唱でき、それらの詩はいつもin the back of my mind、つまり私の記憶の背景になっています。それは二度と達成できないことなのです。英語ではできないことが、ドイツ語ではできるということです。いまでは私もずうずうしくなったものですから、英語でもやっていますけれども。しかし、一般的にはこの距離感を保ってきました。いずれにせよ、ドイツ語は残された本質的なものであり、私も意識していつも保持してきたのです。[4]

アーレントはこのように、彼女にとっての母語としてのドイツ語の意味を、「ドイツ人」ガウスに対して、きわめて明瞭に強調している。パリ時代に知り合い、ともに合衆国に亡命した夫ハイリヒ・ブリュッヒャーがドイツ語を母語とするドイツ人だったことも大きかったにちがいないが、そういう日常性の次元を大きく超えた話である。

ちなみに、「私はドイツの詩の大部分を暗唱でき」の部分、私の手元の英訳版では"I know a rather large part of German poetry by heart"で、日本語訳よりはさすがに押さえた表現になっている[5]。おそらく「ドイツの詩なら暗唱できるのがだいぶありますが」くらいが適当な翻訳ではないだろうか。いずれにしろ、アーレント自身が折に触れて詩を書いていたことにくわえて、彼女が「詩」を自分のインスピレーションの源として大切にしていたことは、晩年の『精神の生』にいたるまで、いたるところで確認することができる。そういうドイツ語の詩をはじめとした彼女にとってのドイツ語の位置――。

あたりまえのことかもしれないが、英語での著作を数多く刊行した彼女だが、その思考は本質的にはあくまでドイツ語でなされていたのである。没後、主にドイツ語で

---

[4] 『アーレント政治思想集成１』齋藤純一・山田正行・矢野久美子訳、みすず書房、2002 年、18-19 頁。このインタビューはもちろんドイツ語でなされたが、まだアーレントのドイツ語の著作には収められていない。この日本語訳は 1965 年に出版されたガウスの著書によっているので、ここでは日本語訳をそのまま引用しておく。

[5] Hannah Arendt, *Essays in Understanding 1930-1954*, New York 1994, p.13.

書かれた彼女の『哲学日記』（Denktagebuch 文字どおりには「思考日記」）が大きな2巻本で公刊されたが、表現言語は英語に姿を変えても、思考の言語としてはあくまでドイツ語が保持されていたのである――もちろん、ヤスパース、ハイデガーなどへ宛てられたドイツ語書簡、とりわけヤスパースとの往復書簡は、それ自体20世紀という時代の貴重なドキュメントとなっている。

実際、前期の主著『全体主義の起源』や中期の代表作『人間の条件』など、彼女の著作はまず英語版で出版されているが、かなりの箇所に補筆・訂正をくわえられたドイツ語版がその後に出版されており、私たちがいまアーレントを研究する場合、基本的にドイツ語版の参照を抜くわけにはいかない。

もう一点、さきのインタビューでのアーレントの印象的な応答に触れておくと、「ヒトラー以前のヨーロッパですか？　何の郷愁もありません」と彼女がきっぱり答えている点である。いかにもアーレントらしい歯切れのいい突き放した言い方だが、これにはアーレントがけっして認めていなかったフロイトの「否定」をめぐる思想を当てはめることができるかもしれない。つまり、ヒトラー以前のヨーロッパへの「郷愁」に対する彼女の強い「否定」は、かえって彼女のうちに存するある種の郷愁を浮き彫りにしているのではないか、ということである。

実際アーレントは、戦後西ドイツを可能なかぎり訪れ、ヤスパースやハイデガーと会う機会を求めているが、とりわけ、1952年に彼女がヨーロッパに滞在していたおり、ミュンヘンで接したヘンデル『メサイア』の演奏は彼女に強い印象を残し、後年『人間の条件』で中心的に展開される「誕生の思考」と呼ぶべき彼女の思想に決定的な端緒を与えた、とさえ言えるのである[6]。

逆に言うと、1964年の時点でアーレントの言う「残ったもの」としての「母語」には、無意識的にはこのような事態までが含みこまれていた、ということにもなるだろう。したがって、ヒトラー以前のヨーロッパへの郷愁を断固として否認したあとにすぐさま「母語」について強く肯定的に語ったアーレントは、自分の否定を自ら再否定している、ということにもなるだろう。

そして、あのナチの時代を超えて「残ったもの」を「母語」と名指すアーレントの感覚は、まさしくツェランのものでもあるのだ。ツェランはブレーメン文学賞受賞講演（1958年）のなかでこう語っている。

---

[6] これについては、2007年3月に刊行されるドイツ学会の年報に掲載される私の論文「アーレントと他者、アーレントの他者」を参照していただきたい。

さまざまの喪失のただなかで、到達可能なもの、身近にあって失われていないものであり続けたのは、このただひとつのもの、言葉でした。

それが、言葉だけが、失われていないものであり続けました、そうです、いっさいの事柄にもかかわらず。

とはいえ言葉はいまや、応答不能という自らの状態を潜り抜けてゆかねばなりませんでした。恐るべき沈黙のなかを潜り抜け、死をもたらす語りの千の闇を潜り抜けてゆかねばなりませんでした。言葉は潜り抜けてゆき、しかも、起こったことに対して一語も差し出すことはありませんでした。しかし、言葉はその出来事のなかを潜り抜けていったのです。言葉は潜り抜けて、ふたたび陽の光のもとに歩み出ることができました、これらすべてのことに「豊かにされて」。

その言葉で私は、あれらの年月のあいだ、そしてそれ以降の年月のあいだ、詩を書くことを試みてきました、語るために、自らの方向を定めるために、私がどこにいて、どこに向かおうとしているのかを知るために、自分自身に現実を描き出すために。[7]

ここでツェランが「起こったこと」と簡潔に表現していること、まさしくドイツ語では“was geschah”というわずか2語で言い表わされていることには、ナチズムの台頭、ホロコースト＝ショアー＝フルブン、そのなかでの両親の死、自らの故郷の解体、それらのすべてが塗りこめられている。それらのすべての出来事を潜り抜けて「言葉だけが残った」というこの痛切な告白は、まさしくアーレントのガウスに対する応答とほとんどそのままと言える。アーレントとは異なってツェランはフランス人のジゼル・ド・レトランジュと結婚し、日常生活はフランス語で送っていたが「母語以外では詩を書くことは不可能だ」と彼は語っていた。ナチス体験を「潜りぬけ」て、にもかかわらず、あるいはだからこそ、ドイツ語という「母語」を支えとしたアーレントとツェラン――。

同時にツェランもまた、主として詩の朗読のために、アーレントと同様に戦後のドイツをしばしば訪れている。故郷のチェルノヴィッツをナチに破壊され、戦後はドイツに頑なに背をむけてパリで暮らし続けたユダヤ人ツェラン――そういうツェランの

7 Paul Celan, a.a.O., S.38.引用は私の訳によるが、前掲の『パウル・ツェラン詩論集』に飯吉訳で収められている。

イメージが私には抜きがたくあるのだが、それにしては彼は頻繁にドイツの各地を旅している。ヘルダーリンの記憶とひとつだったテュービンゲン、ツェランの詩集の版元のあったフランクフルト、親しい作家のいたケルン、そしてそれらを自分の作品の秘かなモチーフとしていったツェラン。このあたりの事実関係は、最近刊行された関口裕昭『パウル・ツェランへの旅』（郁文堂、2006 年）がその種のドイツの研究をも凌駕するかの勢いで、精力的に掘り起こしている。

これも当然のことかもしれないが、母語としてのドイツ語には、さまざまな土地とひとの名前、それらの記憶が分かちがたく結びついてもいる。しかし、そのようにドイツを旅しながら、行く先々で「反ユダヤ主義」のムードを過敏なまでに嗅ぎ取っては、およそ周囲の人間には理解されないような激越な態度で踵を返す、それがツェランの姿だった。彼もまたアーレントと同様にガウスに問われたなら、きっとこう答えたことだろう。「ヒトラー以前のヨーロッパですか？　何の郷愁もありません」。

マンデリシュタームという接線

アーレントが芸術のなかでもとりわけ詩を愛していたことは事実であり、ハイデガーが弟子のペゲラーからの薦めもあって戦後ドイツ語で書いた詩人のなかでとくにツェランを高く評価していたこともよく知られているだろう。したがって、ハイデガーをつうじてであれ、アーレントの記述にツェランが登場しても何ら不思議はないのだが、冒頭に記したとおり、私の読むかぎりでは、アーレントの著作にツェランへの具体的な言及はいっさい見られない。

しかし、『精神の生』のなかで、ロシアのユダヤ系詩人マンデリシュタームへの言及が二度なされていることは、アーレントとツェランの関係を考えるうえで重要である。ロシア革命後の状況に馴染まぬ「芸術派」であり、スターリン批判の詩を書いた「罪」で流刑に処されたマンデリシュタームは、ツェランが強い共感をおぼえるとともに、作品の翻訳にもっとも多く取り組んでいた詩人だからである（マンデリシュタームは 1938 年にシベリア送りとなり、おそらくその中継所で同年の年末に死亡したとされている）。

アーレントは『精神の生』でマンデリシュタームの作品「自由の薄明」の末尾 2 行を引いている。『精神の生』の英語版から原文のまま引用してみる。

We will remember in Lethe's cold waters

That earth for us has been worth a thousand heavens.8

一応日本語訳にしておくと、「私たちはレーテーの冷たい水のなかで思い起こすことだろう／大地は私たちにとって千の天に値したということを」といったところになるだろう。「レーテー」はギリシア神話に登場する「忘却の川」のことである。わざわざ英語の原文で引いたのは、1959 年にツェランがフランクフルトのフィッシャー社から翻訳・出版していた簡潔に『詩集』と題されたマンデリシュタームの作品集に、この作品も含まれていたからである。同じ 2 行をツェランのドイツ語訳で原文のまま引いてみる。

Und denken, Lehte, noch wenn uns dein Frost durchfährt:

Der Himmel zehen war uns die Erde wert.[9]

これも一応日本語訳しておくと「レーテーよ、おまえの寒気が私たちをくぐってゆくときにも、覚えておいてくれ／大地は私たちにとって 10 の天に値したということを」といったところになるだろう。

この作品に関しては、私の知るかぎり二種類の日本語訳がある。マンデリシュタームの妻ナジェージダ・マンデリシュタームの『回想』が『流刑の詩人・マンデリシュターム』というタイトルで邦訳されているのだが、その巻末にはマンデリシュタームの作品が川崎隆司訳で抄録されており、そのなかにこの作品（川崎訳では「自由のたそがれ」）がふくまれている。もうひとつは中平耀『マンデリシュターム読本』（群像社、2002 年）に著者訳で全文が引用されているものである。川崎訳ではこの２行は「レーテーの寒気の中でも忘れまいぜ。／ぼくらにとり　地球は十の天体に値するを」[10]、中平訳では「われらはレーテーの寒気の中でも思い出すだろう、／大地はわれらに十

---

8 Hannah Arendt, *The Life of the Mind*, New York 1978, p.185 of the Two / Willing.（ハンナ・アーレント『精神の生活』下、佐藤和夫訳、岩波書店、1994 年、222 頁）

9 Paul Celan, *Gesammelte Werke Fünfter Band Übertaragungen II*, Frankfurt am Main 1983, S.103.

10 ナジェージダ・マンデリシュターム『流刑の詩人・マンデリシュターム』木村浩・川崎隆司訳、新潮社、1980 年、418 頁。

天に値した、と」[11]となっている。

中平訳では「十天」という一見奇妙な訳語に註が付されていて、「古代の宇宙論では天に九天があり、それが層をなすと考えられていた。ダンテの『神曲』では、その上に神と天使の住む第十天、すなわち至高天がある」と記されている。マンデリシュタームが優れたダンテ論を残していることを踏まえての注釈である。この部分、マンデリシュタームの原文では“д е с я т и н е б е с”となっていて、文字どおり「十の天」である[12]。やはり中平の注釈のとおりダンテを踏まえているのだと思われる。したがって、そこを字義どおりに訳しているツェラン訳がただしくて、たんに量の問題として「千の天」にまで拡張している英訳は、マンデリシュタームの浅い理解にもとづく誤訳ということにもなるだろう。

いずれにしろ肝心なのは、『精神の生』のこの箇所に出典は示されていないのだが、この訳語、さらには訳文の大きな違いからしても、アーレントが参照したのはあくまでマンデリシュタームの英訳版、しかも誤訳の可能性をふくむ英訳版であって、すでに存在していたツェランのドイツ語版ではけっしてなかった、ということだ。ここには確かに際どい擦れ違いがあったと言えるだろう。

さらに言うと、『精神の生』のドイツ語訳では、この箇所は英語訳とほぼ同じで“In Lethes kalten Wassern werden wir gedenken,／Daß die Erde uns tausend Himmel wert war.”（「レーテーの冷たい水のなかで私たちは思い起こすことだろう／大地は私たちにとって千の天に値したということを」）となっている[13]。『精神の生』の英語版自体アーレントの没後、友人だったメアリー・マッカーシーの編集によって未完のまま刊行された著作である。ましてやそのドイツ語版はアーレントのあずかり知らぬものだ。もしも『精神の生』のドイツ語版であらためてツェラン訳が生かされていたりすれば、事態はいっそう錯綜したものとなっていたことだろう。この箇所をアーレントが使っていた英訳に忠実なドイツ語訳にとどめたのは、ドイツ語版訳者の明らかにただしい選択だったと言える。

中平耀の『マンデリシュターム読本』によれば、「自由の薄明」は1918年に書かれた作品で、当初は「讃歌」と題されて発表され、のちに「自由の薄明」と改められ、さらには無題で詩集に収められることになった作品だという。マンデリシュタームの

---

11 中平耀『マンデリシュターム読本』群像社、2002年、142-143頁。

12 以下を参照—Paul Celan, a..a.O. S.102.ツェランの翻訳作品を収めたこの巻は、原文とツェランの訳が見開き形式で掲載されていて便利である。

13 以下を参照—Hannah Arendt, *Vom Leben des Geistes*, München 1998, S.413.

ロシア革命に対する微妙な関係が、タイトルの変遷にまで反映した、いわばいわくつきの一篇なのである。アーレントは『全体主義の起源』でいち早くナチズムとスターリニズムを「全体主義」という枠組みで鋭く批判したが、ツェランのような東ヨーロッパ出身のユダヤ人にとっては、たとえ社会主義ソ連に変わろうとも、ロシア領下でのポグロムの記憶はとうてい忘れ去ることのできないものだった。実際 30 年代にはユダヤ系の人間はスターリンの独裁下でつぎつぎとシベリア送りとなっていった。マンデリシュタームはまさしくそのひとりでもあったのだ。

アーレントは『精神の生』のコンテキストではこのマンデリシュタームの作品を、近代の最後のディレンマに直面して登場したニーチェ的な肯定の、「非アカデミックな証言」として引いている。つまり、ここには形而上学的な彼岸ではなく世俗的な世界としての「大地」に対する、悲痛なまでの大いなる肯定が存在している、というわけである。しかしそれは、ロシア革命直後に書かれたマンデリシュタームの作品という背景に照らすなら、あまりに抽象的な理解であることは否定しえないだろう。ツェランならそこにもっと生々しい現実との関係を読み取っていたはずである。しかも、アーレントはさらにこの作品を、思索 Denken と感謝 Danken をめぐるハイデガーの後期思想と関係づけている。思索と感謝をめぐる重要なテーマについて今回は取り上げることはできないが、これらのことは、もしもツェランとアーレントが具体的に出会うような機会があれば、たとえばマンデリシュタームのこの一篇をめぐっても、両者がきわめて個性的な対話を繰り広げえた可能性を示唆しているだろう。

せっかくだから、４連からなる「自由の薄明」の後半部分だけでも中平訳であらためて引いておきたい。

われらは燕たちを束ねて、
戦闘軍団にした――ほら、
太陽は見えないけれど、自然のすべてが
さえずり、動き、生きている、
濃い薄明の網が立ちこめていて、
太陽は見えないけれど、大地は動いてゆく。

ままよ、やってみよう、不器用だけれど
舵を大きくきしきしいわせて回そう。

大地は動いてゆく。勇気を出せ、みんな。
犂で分けるように海原を分けながら、
われらはレーテーの寒気の中でも思い出すだろう、
大地はわれらに十天に値した、と。

「燕たち」という表現については、今度は川崎訳の訳注で、マンデリシュタームが詩人たちを指して好んで使った表現という趣旨のことが記されている。それにしても、詩人たちが「戦闘軍団」として「大地」を動かすその喜ばしい門出に、「レーテーの寒気」のことをすでに持ち出しているのだから、やはりこれは革命のたんなる讃歌などではありえないだろう。

ところで、マンデリシュタームの妻ナジェージダがロシア語で書いた『回想』に触れたが、アーレントはその英語版を読んだかと、当時パリに暮らしていた友人のメアリー・マッカーシーに 1971 年 2 月 5 日付の手紙で問い合わせ、読んでみることを強く勧めている。これに対してマッカーシーは 2 月 10 付けの手紙で、当然のように、もう読んでいる、もう一度読みたいくらいの本だ、とニューヨークのアーレントへ返信をしたためている[14]。

ツェランがパリのミラボー橋から入水自殺を遂げたのは 1970 年 4 月 19 日から 20 日にかけてと推定されているが、このナジェージダの『回想』のロシア語版は奇しくもその年に、ニューヨークで出版されたのだった。当時ソ連での出版はまだとうてい不可能だったのである。その英訳版“Hope against Hope”はロンドンで 1971 年に刊行されているが、アーレントのマッカーシー宛の手紙の日付からして、その年のはじめ、1 月にはすでに出版されていたのだろう[15]。じつはナジェージダのこの『回想』のドイツ語版がそれに先立って 1970 年、ロシア語版と同じ年にフィッシャー社から刊行されている。アーレントが実際に読んだのはこちらだったのかもしれない。いずれにしろアーレントはほぼ刊行と同時にナジェージダの『回想』を読んでいたことになる。そして、ツェランの自死から 1 年をへていない時期に、ニューヨークとパリのあいだを、

---

14 両者のやりとりについては以下を参照—*Between Friends. The Correspondence of Hannah Arendt and Mary McCarthy 1949-1975*, New York 1995, p.278-280.（『アーレント＝マッカーシー往復書簡』佐藤佐智子訳、法政大学出版局、1999 年、490-497 頁）

15 この英訳版のタイトルは、マンデリシュターム夫妻の苦しみに対してあまりに軽い印象を与えるが、ナジェージダＨＡＤＥＪＤＡという名前がロシア語で「希望」を意味することからも付されたものである。

そのナジェージダの『回想』をめぐって、アーレントとマッカーシーの言葉が行き交ったのである。

にもかかわらず、マンデリシュタームの膨大な作品を訳していたツェラン、つい 1 年に満たないまえにパリで自死したツェランのことは、両者の話題にはのぼらない。これは、当時英語圏の知識人のあいだでマンデリシュタームへの関心がどれだけ強かったかを思わせるとともに、ツェランが詩人としてまだ一般にいかに知られていなかったかを示すエピソードでもあるだろう。

さらに、『アーレント／ハイデガー往復書簡集』に収められている 1973 年 7 月 9 日付けのハイデガーの書簡を読むと、アーレントがハイデガーにやはりナジェージダの自伝のドイツ語版、先に記したとおりフィッシャー社から 1970 年に刊行されたドイツ語版を贈っていたことが分かるのだ[16]。つまり、アーレントは年下の友人、心置きなくつきあえる妹のような位置にいたマッカーシーにナジェージダの自伝を薦めるだけでなく、何とハイデガーにも同書を読むことを薦めていたのである。

そのときアーレントはマンデリシュタームの作品のドイツ語訳、ほかでもないツェランの翻訳で出ていたマンデリシュタームの『詩集』のことをやはり知っていなかったのだろうか。『精神の生』の先の箇所で、アーレントは「自由の薄明」の末尾を引いたあと、さらにリルケの『ドゥイノの悲歌』からの一節とオーデンの詩の一節を並べて引用している。これは、マンデリシュタームの作品に対するアーレントの高い評価をうかがわせる振る舞いだ。だからこそ、アーレントがハイデガーにマンデリシュタームの作品それ自体、ほかでもないツェランによるドイツ語訳を贈ろうとしていたとしても、何ら不思議はないのである（おそらくすでに入手困難だったかもしれないが）。

しかし、このあたりの事情は私には不明のままだ。結果としてアーレントは、ナジェージダという妻、女の立場から見た困難な時代の証言をハイデガーに贈ったことになる。そのとき、スターリニズムのもとでのナジェージダの姿に、ナチズム下の自分の姿を重ねるような感覚も、どこか彼女にはあったのではないだろうか。だとすれば、ハイデガーはアーレントからのこの「贈り物」をどのように受けとめたのか。

いずれにしろ、おそらくハイデガーがナジェージダの自伝に目を通すことはなかったと思われる。アーレントとハイデガーの往復書簡には、これをめぐる記述はその後いっさい登場しない。もしもハイデガーがナジェージダの自伝からマンデリシュター

---

16 *Hannah Arendt / Martin Heidegger ・Briefe 1925-1975*, Frankfurt am Main 1998, S.243.（『アーレント＝ハイデガー往復書簡』大島かおり・木田元訳、みすず書房、2003 年、201 頁）

ム、さらにツェランにまでアーレントにむけて話題を展開するようなことがあれば、ツェランの自死からすでに3年後とはいえ、アーレントとツェランは、マンデリシュタームとハイデガーをつうじてやはり具体的な接点を持つことにもなっていたはずである。もしもそのように事態が推移していたとすれば、そこにはツェランが印象的に語った「子午線」による結びつきがアーレントとツェランのあいだに成立していた、と言うこともできただろう。しかしじつに残念なことに、この結びつきは寸前のところで断たれたと言わざるをえない。

ふたりが見あげていた人工衛星

ところで、アーレントとツェランの関係に着目するならば、先に引いたツェランのブレーメン文学賞受賞講演がなされたのが、アーレントが『人間の条件』の「プロローグ」を執筆したのとほぼ同時期だった、という点も見落とすことができない。アーレントはその「プロローグ」のなかで、それまでの「人間の条件」を根本的に変化させるかもしれない出来事として、人工衛星の打ち上げをあげているのだが、ツェランのこの講演の末尾に登場するのもまた人工衛星のイメージなのである。両者ともじつに敏感にこの出来事に反応していたのだ。

アーレントが『人間の条件』の「プロローグ」を書き、ツェランがブレーメン文学賞の受賞講演を行なった1958年は、1957年の人工衛星の打ち上げ成功の記憶がなまなましく残っていた時期である。正確には1957年10月4日、合衆国に先駆けてソ連がスプートニク1号の打ち上げに成功したのである。秒速8000メートル、地球一週96分の人工衛星は、望遠鏡でも観測できるということで、文字どおり世界中の耳目が当時そこに集中していた。アーレントの『人間の条件』の「プロローグ」はつぎの文章とともに始まっている。

> 1957年、人間が作った地球生まれのある物体が宇宙めがけて打ち上げられた。この物体は数週間、地球の周囲を廻った。そしてその間、太陽や月やその他の星などの天体を回転させ動かし続けるのと同じ引力の法則に従ったのである。たしかに、この人工衛星は月でも星でもなく、また、私たち地上の時間に拘束されている、死すべき者からすれば、無窮としかいいようのない時間、円を描き続けられる天体でもなかった。しかし、この物体はしばらくの間は、ともかく天空に留まることがで

きたのであり、まるで一時、天体の崇高な仲間として迎えいれられたかのように、天体の近くに留まり、円を描いたのである。[17]

もちろんアーレントは、この人工衛星の打ち上げ成功を、諸手をあげて歓迎したのではなかった。むしろアーレントはそこに「人間の条件」の根本的な変容を予感して、強い危機感をおぼえていたのである。この地上の重力に支配されているというあり方がそれまでの人間の決定的な「条件」であったのに対して、もしも重力からいっさい離脱する状態が可能になるとすれば、人間の生活は、生は、どのように変容するのか。そして、重力からの離脱を人間が強く求めているとすれば、それは何を意味しているのか。さらにアーレントが「プロローグ」で考察の対象にしているのは、核エネルギーの開発であり、工場における完全なオートメーションの成立である。それらが孕んでいる、これまでの「人間の条件」を変容させる可能性を、強い怖れをもって受けとめること――。

しかし、『人間の条件』の本文において考察されるのは、これらによる「変化」ではない。むしろ、これらによる変化の可能性を予感しつつ、それまでの人間の条件がどのようなものであったかを根本的に考察すること、そしてそれによって、私たちが新たな人間の条件の変化を受け入れるとすれば私たちは何を失うことになるのか、そのことを彼女の立場からあたうかぎり深く省察することである。「プロローグ」の言葉によれば、「私たちが現に行なっていることを考えること」[18]、それこそが『人間の条件』という著作のテーマそのものなのである。人工衛星の打ち上げという事態を眼前にしながら、それまでの「人間の条件」を根底的に問いなおすこと、20 世紀半ばにいたるまで私たちが行なってきたこと、そして、新たな時代のなかで私たちが捨て去ろうとしているかもしれないこと、それらを根本的に問いなおすこと、である。

ところで先に、ツェランもまたこの人工衛星の打ち上げに敏感に反応していたことに触れた。ブレーメン文学賞の受賞講演の中心には、ほかでもないマンデリシュタームから彼が継承した、詩を「投壜通信」とする印象的なイメージが置かれているのだが[19]、その講演の末尾で彼もまたこのように語っているのである。

---

17 Hannah Arendt, *The Human Condition*, Chicago 1988, p.1.引用は以下のものをほぼそのまま借りている。ハンナ・アレント『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1994 年、9 頁。
18 Ibid., p.5.（邦訳、前掲書 16 頁）
19 これについては、拙著『言葉と記憶』岩波書店、2005 年、17-18 頁を参照。

そして私はまた、このような思考の歩み〔詩を固有の日付をもつ投壜通信として考えること、それによって現実への道を手探りすること〕はたんに私自身の努力に伴われているだけでなく、私よりも若い世代の他の詩人たちの努力にも伴われているものである、と思います。それは、人間の作り物である星々〔人工衛星〕が頭上を飛び交うなか、いままで予感もされなかった意味において天幕なしで、したがってもっとも不気味な仕方で野外に曝されて、現実に傷つきながら、現実を求めながら、自らの現存在とともに言葉に向かう者の努力です。[20]

ここでツェランが指摘しているのは、地上を覆っていた「天幕」が人工衛星によって引き剥がされた状態である。それまでは天上の秩序と地上の秩序、その関係のなかで人間は現実における自分の位置を測ろうとしてきた。しかし、天上の秩序がもはや人間の人工物によって実際に組み替えられるとき、天上はひたすら暗黒の深淵としての口を広げる。地球を覆う聖なる天蓋は引き裂かれ、それによって人間は「もっとも不気味な仕方で野外に曝されて auf das unheimlichste im Freien」いるのである。

アーレントもまた『人間の条件』のドイツ語版『活動的生Vita activa』において、この人工衛星の打ち上げがもたらした「不気味なものという感覚Gefühl des Unheimlichen」について触れている[21]。それはまた『人間の条件』および『活動的生』の印象的な言葉を用いるなら、まさしく「地球疎外earth alienation, Erdentfremdung」と呼ばれるべき事態、巨大な梃子で地球を外部から動かしうるような、遥か遠くの宇宙の一点から地球をまなざす感覚である。人工衛星を振り仰いでいたときのふたりのこの感覚は、『ドゥイノの悲歌』と同時期に書かれたリルケのつぎのような詩と深く響きあっていたことだろう。

心の山頂で吹き曝されて。見よ、かの地が、言葉の最後の村が
どんなに小さく見えることか、そしてその上方には、
感情の最後の農地がある、これもしかし何と小さなこと
おまえはそれを見分けられるだろうか？
心の山頂で吹き曝されて。岩の地面だ、両手の下は。
ここでも確かに、二、三本の花は咲くだろう。

---

[20] Paul Celan, *Der Meridian und andere Prosa*, S.39.（『パウル・ツェラン詩論集』62-63 頁、ただし引用はやはり細見の訳によっている。また〔　〕内は細見の付記）
[21] Hannah Arendt, *Vita activa*, München 2002, S.7.

知をもたない草は、歌いながら、
花を開かせることだろう、黙した切岸からも。
けれど、知をもつ者はどうか？　知をもつことをはじめ
心の山頂で吹き曝されて、いまや沈黙している者は。
そこでは確かに、健全な意識をもった、いく頭の獣たち、
守られた山の獣たちがあたりを行きかい、また身を休めている。
そして、守護された大きな鳥が、頂点をなす純粋な拒絶のまわりを
ぐるぐると飛んでいる。――しかし
隠れ場もなく、ここ、心の山頂では……[22]

ツェランは若いころからリルケの詩に親しんでいたし、アーレントは繰り返しリルケに言及している。傷ましいまでのリルケの実存感覚が如実に表わされたこの「心の山頂で吹き曝されて Ausgesetzt auf den Bergen des Herzens」という作品は、ふたりにとって綱領にも等しい一篇だったろう。「隠れ場もなく、ここ、心の山頂では ungeborgen, hier auf den Bergen des Herzens」という末尾の 1 行など、ツェランのブレーメン賞受賞講演の結びのイメージそのものではないだろうか。

しかし、リルケは「心の山頂」で、なお「知をもたない草 ein unwissendes Kraut」や「健全な意識をもった heilen Bewußtseins」獣たち、「守護された大きな鳥 der große geborgene Vogel」の存在を認めてもいる。しかし、ホロコースト＝ショアー＝フルブンをへて、人工衛星が頭上を飛び交う時代に、アーレントとツェランにとって、人間の知の対極にある「自然」に信頼を託すことは、もはやほとんど不可能だっただろう。人工衛星の打ち上げ成功は両者にとって、リルケが吹き曝されていた「心の山頂」をいわば無重力圏にまで押し上げたのである。その位置からまなざすならば、彼らにとっての言葉、「残ったもの」としてのドイツ語はリルケにそう見えていたよりも遥かに「小さなもの」と映っていたはずである。そういういっそうの困難さを背負って、なお「言葉の最後の村」に目を留め、「感情の最後の農地」を耕すこと――。

ナチの時代をへて、それぞれ合衆国とフランスという新たな世界で、日常語として英語とフランス語を日々の生活に組み込みながら、「母語」へのこだわりを持ちつづけていたアーレントとツェラン、この両者が、ニューヨークとパリで強い危機意識をも

[22] Rainer Maria Rilke, *Sämtliche Werke Bd.3*, Frankfurt am Main 1957, S.94f.（『リルケ全集』第 2 巻、富士川英夫ほか訳、弥生書房、303 頁。ただし引用は細見の訳による）

って見あげていた「人工衛星」――。この関係は、「戦後」、20 世紀半ばのひとこまとして、私たちに忘れがたい印象を残すのではないだろうか。マンデリシュタームへのふたりの強い関心をつうじても繋がりそうで繋がらなかったあのうっすらとした切れ切れの子午線を、彼らの頭上の遥か彼方で、皮肉なことに、人工衛星の軌道がなぞっていたのである。

＊　＊　＊

以上、アーレントとツェランをめぐって、両者を結びえたいくつかの「子午線」について触れてみた。本来、もっとも重要なハイデガーとの両者の関わりを焦点化すべきだったが、このあまりに大きなテーマについては、またの機会に譲りたい。ここではそのための補助線のいくつかを引くことができたことで、満足しなければならない。

（2006 年 12 月 31 日受理）

Hannah Arendt und Paul Celan
Zu einigen zwischen ihnen laufenden Meridianen

Kazuyuki HOSOMI

Hannah Arendt und Paul Celan haben, die eine als jüdische Denkerin, der andere als jüdischer Dichter, ein schweriges Leben im 20. Jahrhundert geführt, aber sie hatten keinen persönlichen Kontakt. Wir finden in Arendts Texten keine Erwähnungen von Celan und noch in Celans Texten eine von ihr. Wenn wir aber nur den Namen Heidegger dazwischen setzen, so können wir die Wichtigkeit ihrer Beziehung leicht erkennen.

In dieser vorliegenden Arbeit möchten wir versuchen, einige zwischen Arendt und Celan laufende “Meridiane” zu bestätigen, damit wir das noch umfangreichere Thema über die Beziehung zwischen Arendt, Heidegger und Celan behandeln könnten.

Ein Meridian, auf den wir hier hinweisen, ist die Tatsache, dass beide gesagt haben, was bleibt nach Nazis Zeit, sei die Sprache (Muttersprache). Der andere Meridian ist ihr großes Intersse an dem russisch-jüdischen Dichter Mandelstam. Der letzte ist die Tatsache, dass sie beide den Erfolg des künstlichen Satelliten 1957 für ein “unheimliches Ereignis” gehalten haben.